

第21講

小説(2)——心情説明

要点整理

登場人物の心情を問う設問が心情説明問題である。小説は心情を中心に話が展開されることから、読解の中心は心情の把握に置かれる。その代表的な設問形式には次のようなものがある。

・傍線部「……」とあるが、この表現からうかがわれる〴〵の心情はどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

・傍線部「……」とあるが、この時の〴〵の心情の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

◎解法のポイント

- ① たいていの場合、問題文の前にストーリーへ入りやすくするために導入文が置かれている。それをもとに時代設定、登場人物の置かれている立場・状況や人物相互の関係などの土台となる設定をきちんと把握する。
 - ② 場面の展開をおさえながら、登場人物の心情がどのように推移しているかを把握する。その際、登場人物の心情を描写した箇所を見落とさないようにする。
 - ③ 選択肢を吟味する前に、登場人物の心情を端的に表現するとどうなるか、自分なりに考えておく(「不安」「喜び」「落胆」など)。選択肢では、心情説明の違いに留意し、自分が予想した心情との異同を確認する。
- 心情説明問題は、自分の先入観や登場人物に対する好悪の感情を入れて読んだり、深読みしたりせず、評論に対する読解と同様に、あくまでも問題文に根拠を求め、客観的に読み取れる範囲内で解答を出す。

演習問題 A

次の文章は、野呂邦暢『白桃』の一節で、戦後の食糧難の時代を背景としている。ある日、少年とその兄は、かつて父の使用人であった酒場の主人のところへ使いに出了れた。これを読んで、後の設問に答えよ。

秋であった。

医師は妹の肺炎にベニシリンがいるとつけた。金さえあれば解決することである。兄弟は包みをもたされて、それは九歳と十二歳の子供にもてるくらいの量だったが、店へやって来た。

主人はいつもの上機嫌で心得顔に二人をむかえ、包みをうけとって奥へ消えたまま出てこない。ついさつき、気むずかしい顔つきの男が呼ばれて奥へ去ったのも、包みにかかわりがあると思われて弟は不安だった。

客の出入りは多かった。

「どうしたんでしょうねえ」

TIP②

読解のポイント

(1) 二箇所の傍線部についてその心情の違いを尋ねたり、傍線部に至るまでの心情の推移を尋ねたりする設問もあるので注意が必要。

(2) 登場人物の心情を追う際には、まず、直接的な心情表現に着目する(「嬉しい」「悲しい」「腹立たしい」など)。つづいて、会話文や動作表現など心情が現れている言動に着目する(〈例〉「……、私がもう一度言う、踊り子は赤くなつて、非常に真面目な顔をしたながら軽くなずいた(川端康成『伊豆の踊子』)↓はずかしさ)。また、場合によっては自然描写などが手がかりになることもある。

(3) 選択肢を検討する際には、場面の展開や時間的な推移に従って心情の変化をたどる必要がある。誤りの選択肢の中には、場面的・時間的に後の部分の心情を説明したものが含まれていることがあるので、注意が必要である。

重要語句

◇上機嫌 たいへん機嫌のいいこと。

わずかな暇をみて女主人が奥へ去り、しばらくしてもどると、二人のまえにおいてあった桃をとりあげて皮をむきはじめた。女主人はなにかいうのだろうか顔をみつめても少年たちには黙っている。

奥で、なにかのつびきならないことがおこったのかもしれない、と弟は想像した。女主人の細い指が器用にナイフをあやつって、手の中で桃をあたかも一つの毯のようにくるくるところがしながら皮をむくの彼は見ていた。皮は細い紐になってテーブルの上におちた。

皮をむかれた桃は、小暗い電灯の照明をやわらかに反射して皿の上にひっそりとのっている。汁液が果肉の表面ににじみ出し、じわじわと微細な光の粒になって皿にしたたた。弟はテーブルから目をそむけた。

しかし、壁を見ても客の姿を見ても、目にうかぶのは輝くばかりの桃である。淡い蜜色の冷たそうな果実は、目をとじてさえも鮮やかに彼の視界にひろがる。戦争以来、何年も見たことのない果実であった。

女主人は客のいるカウンターへ去った。

「帰ろうよ」

弟はささやいた。

「お金をもらったら帰る」

兄がおもおもしろく宣言した。弟の目には兄がおとなっぽく映った。自分ひとりが乳のみ児のように道理をわきまえない子供だと思われ、それが肚だたしきもあつた。いったい兄は皿の桃をどう思っているのだろう。手をのばして触りたくもないのだろうか。大豆滓ととうもろこしの雑炊を食べていて、どうして平然とおちつきはらっていられるのだろう。弟はズボンのポケットに握りこぶしを入れ背をまるくしてうなだれた。兄はいう。

「おまえが小さいときは何でもあつたのだよ。チョコレートもカステラも。忘れたのかい、食べきれずにするほどだった」

いよいよ弟は背をまるくした。兄が嘘をついているとは思わなかったが、そんなことは一つもおぼえていなかった。たぶん事実だろうが、何でもあつた昔々を考えるのはつらかった。今は何もないのだから。

そのとき大きな手が兄弟のまえのテーブルをたたいた。二人は顔をあげた。酒場の主人がどざりと風呂敷包みを投げだしてせきばらいをした。

「見な、わしはやすやすとごまかされるそいらのちんぴらとは違うんだよ。初めこの米を見たとき、なんとなく色つやが悪いと思つたな。明かりのせいかと思つて奥の電灯でしらべてみた。念のためこの人に立ち合ってもらつて飾にかけてみた」

「おれ、帰るからな」

立合人は兄弟を等分に見くらべてから店を出ていった。主人はふりむきもしなかった。

「飾にかけてみたらおどろいたよ。屑米と糠がたつぷり混ぜてあるんだ。いいかね、おやじさんに頼んだのは鮎につかう上等の米だよ。これがかえるかい。あんまりみくびつてもらいたくないもんだ。そうとも、昔は社長のお世話になつたさ。だれど恩返しはしたつもりだ。酒代だつてだいたまつているが、一度も催促なんかしやしない。要する

35

30

25

20

15

10

◇雑炊Ⅱ野菜や魚介類などの具と飯を水

で一緒に煮た食べ物。おじや。

◇平然Ⅱ周囲の様子に動じない様子。平気な様子。

◇ちんぴらⅡ下っぱのやくぎ。不良少年。

◇飾Ⅱ金網などを底にして枠をつけた道具で、粒状の物をその大小によって分離するもの。

◇糠Ⅱ玄米を精白する際に出る、薄皮の粉。

◇みくびるⅡあなどる。

にわたしのいいたいことはだ、社長ともあろう方がこんなけちなペテンをなさるとは残念なんだ。こう申しあげてくれ。鯨につかえる上米ならいつでもしかるべき値段で引き取らせてもらいます、とね」

「おっさんよう、いい加減にしねえか、相手は子供だろ」

客の一人がカウンターから声をかけた。

「おっさん、だれだって今は何かしらやらないと生きてゆけないんだよ。ペテンの一つがどうしたんだい、ええ、大損したわけでもないんだろ、それにあんた噂ではメチールでしこたま儲けたそうじゃねえか」

「うるさい、貴様にわたしの気持ちかわかるもんか、うちの酒がまずかったらさっさと出てゆけ」

いきりたった主人のけんまくにおどろいて店じゅうの客が兄弟の方を見た。相手は子供だろ、といった男は口の中でなにかつぶやきながら主人から目をそむけた。弟は兄をふりあおいだ。兄は言葉もなくうなだれている。女主人がテーブルにひろげた米をつつみなおして主人に提案した。

「こちらのふつうの米だけでも引き取ってあげたら」

「おまえまでそんなことをいう、いや、この際は断固として……」

女主人は客の方へ去った。

二人は包みを抱きかかえて店を出た。月が空を明るくしていた。白い皿のようなそれは兄弟が店にいる間にのぼったらしい。

「ほら」

弟は兄のシャツを引いた。

「なんだよ」

とげとげしい返事に弟はあわてた。月の光が昼とはまったく異なる物の影を地上につくりだしているのに弟はおどろいたのだった。その異様な夜景に兄の注意をひこうところみて、彼はそくぎに黙りこんだ。今の兄が銀色の月に陶酔できるはずがない。

弟は身ぶるいした。空気はことのほか冷たかった。空腹のあまり胃が痛かった。手の包みが石でもかかえているように重たかった。

「どうしよう」

うって変わったように弱々しい兄の口調にかえって弟はおどろいた。

「どうしようって、仕方がないさ。帰ってお金はもらえなかったというさ」

「がっかりしたな。皆ぼくたちを見てたぜ、まあ何だな、出された桃は食べなかったしさ」

二人は道ばたに腰をおろした。弟は鼻をうごめかせ、いい匂いがする、とつぶやいた。

木犀だよ、秋になると今ごろ匂うそうだ」

「おまえ、その木を見たのか」

「見ない」

◇ペテンⅡ人をだますこと。いかさま。
◇しかるべきⅡ適当な。ふさわしい。

◇しこたまⅡたくさん。どっさり。

◇けんまくⅡ相手と争おうと激しくいきりたった態度。「剣幕」などと書く。

◇とげとげしいⅡ話し方や表情などがいかに意地悪できつい様子。

◇陶酔Ⅱ①気持ちよく酔うこと。②うつとりとその境地に浸ること。

◇身ぶるいⅡ寒さや恐ろしさ、または勇みたったために体が震えること。

◇うって変わったようにⅡ前とがらりと変わって。

◇口調Ⅱ話し方。語調。

◇木犀Ⅱモクセイ科の常緑樹。キンモクセイ・ギンモクセイ・ウスギモクセイの総称。花は甘い芳香を放つ。

「さがしてみよう」

通りはすでに明かりを消した家が多く、木犀の匂いは暗い路地の奥から歌うように流れてきた。兄弟は包みを水タンクのかげに隠して立ちあがった。弟が先に歩いた。まずきのう妹をはこんだ病院をさがし、それはすぐにみつかった、そこから家へもどる道すじを逆にたどって、初めてきのう木犀が匂った角で立ちどまった。

「おまえはむこうをさがせ、ぼくはこっちを行ってみるよ、匂いのいちばん強い所が木犀の生えてるとこだ、花をもつて帰ろう」

弟はためらった。兄とはなれるのが今夜にかぎって心細かった。飢えた野犬が多く焼け跡をうろついていて、人を襲うこともきいていたからである。

「兄さんといっしょにその道を行って匂いがうすれたら逆もどりしてもいいんじゃない」
「それもそうだな」

弟は空腹を忘れた。月の光のもとで何かをさがすというのは秘密めいた昂奮をおほえるものであり、店での屈辱を忘れることもでき、夜おそく戸外へ出た経験はなかったから、冒険の一種とも感じられた。

足がひとりで軽くはずみ、二人はほとんど駆けるように家並みを縫って急いだ。匂いはあるときは鼻をうつほど強く、あるときはその場にたたずんで息をつめなければ感じられないほど稀薄になった。

二人は立ちどまった。匂いがそこで断ちきられたように消えている。弟は荒い呼吸をととのえ、深々と肺の奥まで夜気をすいこんだ。そうするとやはり木犀の匂いは微かに漂っているのがわかった。二人はあせった。

こうなったからにはどうしても木犀の木を発見しなければならぬ。家々にともっていた最後の灯が消えた。ずいぶん遠くまで来たように感じられる。

「ここはどこだろう」

兄の語尾がふるえていた。あたりの家並みはまったく見おぼえない。月の光をあびて黒々としずまりかえっている家は、うずくまった獣のかたちに似ていた。弟は夜の光が露わにしたこの異様な世界のたたずまいに酔った。

「え？」

「いや、何でもない」

と弟は口ごもった。目のまえに出現した夜景の珍しさを再び兄に語ろうとしかけて、そのとき自分の見ている物を兄もまた必ずしも見ているとは限らない、ととつさに理解したのである。彼は、え？ と応じた兄の口調に不安をいらだちしか感じることができなかった。

(注) ベニシリン…抗生物質。

大豆滓…大豆から油をしぼり取ったかす。

メチール…メチルアルコール。毒性が強く、飲む量によっては失明、死亡することがある。

95

90

85

80

75

70

◇屈辱Ⅱ屈伏させられてはすかしめを受けること。

◇たたずむⅡ立ち止まり、じっと立っている。

◇夜気Ⅱ①夜の冷たい空気。②静寂な夜の気配。

◇抗生物質Ⅱ細菌の発生を抑制する作用、または制癌作用を持つ物質。黴や放線菌、細菌などからつくられるが、科学的に合成されるものもある。

問一

——線①「自分ひとり乳のみ児のように道理をわきまえない子供だと思われ、それが肚だたくもあつた」とあるが、このときの弟の心情の説明として最も適当なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

ア 妹のためにお金を得ることだけを考えている兄に比べて、米が売れそうにもない不安から帰つてしまおうとする自分が幼稚に感じられ、情けなく思っている。

イ 必ず役目を果たすという強い意志を持って臨んでいる兄に比べて、そんな意欲を持てず放棄したいと考える自分が卑怯に思われ、怒りを感じている。

ウ 桃を食べることが絶望的になり、兄に帰りたいと言つたため、周囲から兄に比べて幼稚だと思われてしまい、そんな事態を招いた自分に腹を立てている。

エ ひたすら役目を果たそうとしている兄に比べて、桃の魅力に耐えられずこの場から逃れたいと考える自分が幼く感じられ、いまいしく思っている。

オ 感情を表に出さない兄に比べて、桃を食べたいという欲求を抑えきれず態度に出してしまう自分が卑しく思われ、嫌悪を感じている。

問二

——線②「要するにわたしのいいたいことはだ……残念なんだ」とあるが、「社長」に対する主人の心情を説明したものとして最も適当なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

ア かつては社長との間も対等で、互いに信頼し合う関係が成り立っていたにもかかわらず、一方的にそれを壊すような行動をとられたことに対し、言いようのない寂しさと悲しみを感じている。

イ 昔は人を使うほどの地位にあつた者が今では平気で人をだますようになってしまったということが、生きていくために手段を選ばなくなった今の自分の生活ぶりに重なり、そのことをつらいと思っている。

ウ 生きるためには多少の悪事もやむを得ない時代とはいえ、以前は真つ正直な人間で自分を助けてくれたりもしたのだがと、社長の変わりようを嘆き、改心してほしいと願っている。

エ かつて自分が雇われていたころとは逆に、今はこちらが何かと世話をしてやっついて感謝されてもいくらいなのに、恩を忘れ自分をだまそうとする相手に、驚きあきれている。

オ 見えた手段で自分をだまそうとした社長に対して、以前はこんなことをする人ではなかったというやりきれない思いと同時に、それほど自分を低く見ているのかと怒りを感じている。

問三

——線③「まあ何だな、出された桃は食べなかつたしさ」とあるが、ここからうかがえる兄の心情はどういうものか。その説明として最も適当なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

ア 米の売場で面目をつぶされたので、桃に手を出さなかつたことを持ち出して兄としての立場を回復しようとしている。

イ お金を得ることができず途方に暮れ、桃を食べなかつたという判断の正しさをせめて弟に確認しようとしている。

ヒント

△心情説明を求める設問。弟は自分を子供っぽいと思い、自分に腹を立てていることをおさえる。

△心情説明を求める設問。社長に対する主人の「残念」な気持ちを、前後の文脈から具体的に把握する。

△心情説明を求める設問。とげとげしい返事をした兄が、急に弱々しい口調になったことから、兄の感情の起伏を読み取る。そしてこれをふまえて傍線部を検討する。桃を食べなかつたことが、

る。
ウ 屈辱感にうちひしがれながらも、桃に手を出さず、毅然とした態度をとれたと思うことで自分を支えようとしている。

工 取引に失敗した今、こんなことなら桃を食べればよかったと後悔しているが、弟の手前、負け惜しみを言っている。

オ 取引に不利になると思っただけで、今はそれが酒場の主人への当てつけになったと考えている。

問四

——線④「自分の見ている物を兄もまた必ずしも見ているとは限らない、ととつさに理解した」とあるが、本文を通して見いだせる兄と弟の違いを説明したものとして最も適当なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

ア 目の前のものに対して弟は自分の感受性に従い次々と心を動かされていくが、今置かれている状況にどう対応するかということに目が行く兄は、現実には立ち帰ってものを考えようとする。

イ 深刻な状況でもささいなことに楽しみを見いだす心の自由さを持つている弟に比べ、何かにつけて先回りの心配をしがちな兄は自分の感情に振り回され、思いのままの行動がとれなくなっている。

ウ どのような状況に置かれていてもただ兄について行きさえすればよい弟は無心なままでもいられるが、年長者としての兄には行動に責任がつきまとい、大人の立場で厳密なものごとを見ようとする。

エ 同じ状況で同じものを目の前にしていても、弟は直接目に見えないものにまで意味や象徴性を読み取るうとするが、兄はあくまでも見えるものそれ自体に即して現実的に思いをめぐらせようとする。

オ 幼くて世の中の経験も少ない弟が目の前のことを素直に楽しんでいられるのに比べ、わずかながらも世間の風にあたっている兄は、その経験にどうしても左右され、今を見失いがちである。

問五

この文章において「木犀」はどのような役割を果たしているか。その説明として適当でないものを次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

ア 木犀は、弟だけでなく、酒場で大人っぽい態度をとっていた兄にも子どもらしい感情を取り戻させ、一時的にはあるが兄弟に解放感をもたらしている。

イ かすかな匂いを頼りに探す木犀は、当初の目的である薬代のかわりとなるものであり、何かを強く望めばそれが手に入ることもあり得るという実感を兄弟に与えている。

ウ 木犀は、二人に酒場でどのような体験を忘れさせ傷をいやしてくれる存在だったが、結果的には弟に兄の言動を見直させ、心情的に距離を生じさせる契機となっている。

エ 暗やみに香りを漂わす木犀は、兄弟をこれまで見たこともない世界へと誘い、木犀を探すという共通の目標によって、二人をつかのまの一体感を抱かせている。

オ 木犀は、子どもたちの生き生きとした行動を誘発することによって、二人が大人社会の現実と直面する前半とは対照的な世界を作り出す要因となっている。

兄弟にとってどのような意味を持つのかを考える。

◇当てつけはつきりとは言わずに何かを見せたり聞かせたりすることによって、相手を非難する気持ちを表すこと
△内容説明を求める設問。桃や夜景に対する兄と弟の受け止め方の違いを把握する。

△本文全体の把握を問う設問。「説明として適当でないもの」である。間違えないように。本文は、兄弟が酒場でお金を得るためのやりとりを描いた前半と、二人が木犀の匂いに引かれて夜の町を歩き回る姿を描いた後半とから成る。木犀が二人にとってどのような意味を持っているのかを理解する。